

# 木の駅&森の学校 通信

発行：信州なかがわ木の駅実行委員会 代表：宮澤優人 事務局：齋藤真吾（中川村役場耕地林務係内）

## 「信州なかがわ木の駅」

### 人も木もいっぱい集まったよ！

木の駅アドバイザー 丹羽健司

「楽しかった！」出荷者Aさんの振り返り第一声でした。三月十七日から始まった木の駅社会実験は十二名が二七㎡（軽トラで約五〇台）出荷し一三五枚の地域通貨「里山券」が流通しました。十三万円余りの地域通貨が七店舗を巡りました。「山が明るくなった」「山で汗を流して晩酌できてうれしい」「搬出や伐倒の技術をきちんと習いたい」「集落の山を皆で間伐して出荷してもいいか？」などなど四月と五月の実行委員会でいろんな感想が出ました。

昨年末から準備会・実行委員会を重ねてきました。「なんで地域通貨？現金じゃダメか」とか「そんなの誰が出すもんか」「役場が全部やりやい」とか、ワイワイガヤガヤやってきました。

「秋から本格実施するのか、出来るのかも含めて、まず社会実験として二か月やってみようよ」ということで三月から出荷が始まりました。実験

だから失敗してもいいし、むしろそこから学ぼうということになりました。その結果、本年十一月から本格集荷を始めるための準備を進めることになりました。

#### ●木の駅で

村の心と体と懷を暖めよう  
木の駅は、林地残材や間伐材を土場に持ち込めば、相場に近い価格で村の商店だけで使える地域通貨に交換する仕組みです。荒れた山がきれいになり、お店も少し元気になります。

実行委員会では、その集まった材を、村内の薪ボイラーや薪ストーブ利用者へ熱源として販売していこうという計画です。これまで石油代として外国に流出していた燃料費が原木代や薪割賃として村内だけで循環し、地域通貨として村内のお店も潤します。

増えるのは荒れた森と獣ばかり、人口も商店も減少の一途、そんな同じ悩みを持つ全国の山村で「木の駅」が始まり、そこでは山とお店が少し

ずつ元気になっていきます。このような木の駅は全国で約八〇駅にものぼります。  
筆者（丹羽健司）はそれらの立ち上げにほとんど関わって来ました。これからしばらく中川村に通わせていただき、村の様子を本誌で毎月お伝えしていきますので、よろしくお願ひします。



丹羽 健司

#### ●みんなで中川村をまるごと森の学校にしよう。

今回の木の駅の実験でも明らかになったことは、「森のこと、山里のことをもっと学びたい」ということでした。

そこで、「ふるさと財団」の助成を受けて、木の駅の立ち上げ・稼働だけでなく、「森の学校」構想が始まりました。

内容は大きく三点

- ① 村人向け山仕事の学び直し
  - ② 移住者の学びとプロ化
  - ③ 都市住民の学びと指導
- です。
- ①は山仕事をイチから学び直すことです。木の伐倒・搬出、

チェンソーの目立てから施業計画の立て方までを実践的に学びます。

②は移住（希望）者が中川村にたくさんいる森の名人、山里暮らしの達人から知恵と技術を学び、次代に教え伝えることができるようになる場。

③は、今後需要増が予想される最も美しい村を訪れる都市住民たちの森林・山里体験指導者スタッフ養成講座。

「木の駅」も「森の学校」も中川村地域おこし協力隊卒業生の齋藤真吾さんが事務局です。お気軽にお声掛けください。



事務局：齋藤真吾  
元地域おこし協力隊

#### ●お問い合わせ・連絡先

お気軽にご連絡ください！  
（中川村振興課 耕地林務係）

本事業は、平成三十年度新・地域再生マネージャー事業として地域総合整備財団（ふるさと財団）の宝くじの収益金を活用した総務省の管轄下の助成事業です。